近世美談

大川仁政録

第肆輯

壹

へ13
3348
1

へ13
3348
1

松亭主人著

大川仁政録

歌川芳梅畫

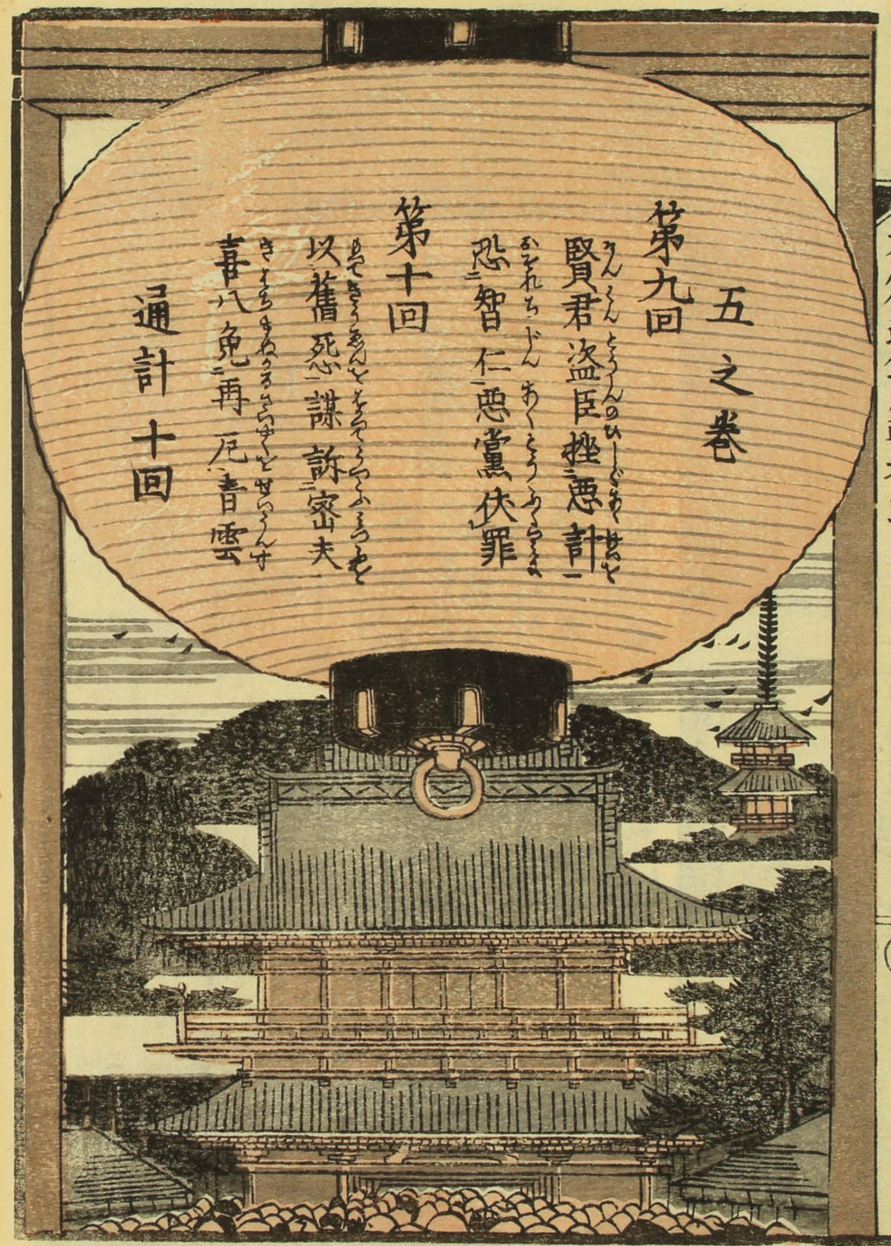
大正十年八月廿九日寄
本大學出版部

三之巻

第五回 慾ケ窪吉之助拐金銀 喜八古主愛子盡忠義
第六回 喜八薄命發賊心 伊平感志惠黄金

四之巻

第七回 棋女守節詈奸邪 義侠碎肝助忠夫
第八回 烈女路傍訴寃罪 豪賊伊平自訴廳



大川家系譜

清和天皇六代
新羅三郎義光六代孫

- 長經　小笠原彈正少弼
  - 長房　小笠原阿波守　阿州小笠原祖
  - 長忠　小笠原信濃守　信州小笠原祖
  - 朝光　大井太郎　大井左地頭　信州佐久郡
  - 光長　大井小太郎　弘安七二八卒
  - 時光　大井孫三郎
  - 光泰　大井二郎
  - 行光　大井三郎兵衛佐
    - 行時　大井三郎二郎
      - 朝行　大井小四郎
      - 定光　大井右衛門佐　永徳三八十二卒
      - 懐光　大井陸奥守　應永六四十三卒
      - 持光　大井越前守　管領持氏卿賜諱一字　永享十年瑞泉寺昌在西堂携永壽王丸逃来　同十年結城籠城雄氷　嶺合戦七月十八日討死
      - 教光　三郎　大井越前守　足利將軍義教公賜諱一字　依二台命一姓大川与改
        - 教長　大川伊豫守
        - 成光　大川小太郎　佐渡守
        - 宗成　大川民部少輔
        - 女　武田布施安藝守信清妻　昌在西堂母
        - 女　持氏卿上臈女房
        - 女　武田吉田刑部大輔成春妻

大川越前守教光
おかわえちぜんのかみのりもつ

侠客条八
きょうかくじょうはち
貞婦於楳
ていふおうめ
胴脉熊吉
どうみくのくまきち

厂山友之進 うたやま とものしん

田湖伊平 たごのいへい
煙艸屋青八 たばこやきち
山田雲平 やまだうんへい

花扇屋司とるあ〜ふきや つかさ
戀ケ窪五八のごとち
若旦那吉之助きちのすけ
松葉ケ谷平蔓のへいたん
□画出象三図
貞信景明画
彫工 中村鉄蔵

近世美談 大川仁政録肇輯 目録

壹之巻

第一回 明君興家芳名轟四海 隨教小喜三郎出鎌倉
第二回 於草加驛喜八墓於棋侠客条八憐恋情婦妬

貳之巻

第三回 喜八於棋結赤縄 若宮小路鬻煙艸
第四回 櫻馬場負婦賣身 夫婦信實得幸福

近世美談 大川仁政録肇輯巻之壹

松亭主人著

大川越前守教光朝臣少令尹話

聖語小曰く訴と聽事吾猶人のごとく必ず哉訴へ無きをん乎誠ふき者ハ其詞と是ハと公得ると少令尹縣官として街人農夫等の公事訴訟に於く善悪邪正と明白ふ仁慈ふ含んで載断有ん迚正聽決んと公得るといへども大古堯舜両帝の聖代ハ如く諫鼓に苔蒸て鶏栖で驚くべとふ迚い及ひがたしと歎息の詞ふく常例の公事訴訟と載許為ハとふ事さへも賢明仁智の君ふ〜でハ善悪邪正と白日晴天の如く明白ふ載断為んことハ難さふ似ようとハ

是ハ人皇百三代後花園帝の御宇文安年中將軍家に於てハ足利八代左大臣従一位准三后征夷大將軍贈大相國義政公四海を静謐ハ鎌倉官領六代従四位下左馬頭源成氏朝臣両君東西ハ在て日月の如く天下を治めまゝ戸さゞぬ聖代とぞ仰ぎる時ハ鎌倉府内を預て寺社兼帯有て市中ハ公事訴訟を裁判有る大川越前守源教光朝臣といふ名ふ賢明仁智の君子なりとて又持光退轉の家を奥業ハ柳營ハ於て御側御用を勢らを城ハ下嵯峨ハ居館を（今の代官屋敷の辺り）かまへて大井と代々名乗来りるゞ前將軍義教公の諱を一字賜いて大井と呼事先代よりの氏とハ云ゞ詔路ひかりなをべ幸大井川の邊ハ居館をれべ井の字を畧して向後大川と称せよと台命を蒙りて大川とぞ名乗らを此教光の先考を索るに清和天皇六代の孫新羅三郎義光六代の孫小笠原彈正少弼長經の三男大井太郎朝光と名乗り信及佐久郡大井の荘地頭とある其子大井小太郎光長弘安七年二月八日卒を嫡子弥三郎時光四男有て其子小四郎朝行家督相續其子大井右衛門佐定光永徳三年八月十二日卒ハ其子大井陸奥守懐光應永二十四年十二月七日卒ハ其子大井越前守持光鎌倉持氏卿呢近永享十年瑞泉寺昌在西堂と共ハ永壽王丸を懐て迎来り同十三年結城ハ籠城して確氷嶺ハ合戦して七月廿八日戦死ハ及其子教光京都室町家へ降参を城及下嵯峨ハ居館寸御側ハ召を賢明仁智成ゞを永享十二年八月執攉

細川右京太夫勝元の取立を以家督相續有て其後鎌倉の
執權上杉修理太夫政真が懇望ふ預り宝徳元年十月從五位下に
受領有て鎌倉ふ下り少令尹ふ補せられ寺社兼帶有て鎌倉府中
の政事を司る鎌倉居館ハ山の内明月院の東ゑ有て後家と奥
ゑ再び信及よかへりて佐久郡小諸ふ居城を家の長ハ狩石和
小三郎曽根三郎太郎小川五六郎を以て政事を補ハ内室武
田布施安藝守信清の女ゆり此信清といふハ同姓甲斐國山科郡
躑躅ヶ崎の城主ゑて家領十四万五千四百石余なり再説信濃國
の大井氏ふ小笠原流と武田流との別ゆり其小笠原ハ出る家ハ
松皮菱を用ひ或ハ九の内ゑ武田ハ分る流ハ花菱を横ふ用ひ抑花

菱ハ揩無し鎧の下金物ふ〻して　後冷泉院の恩賜の器械なりと
朝恩の光榮を顕さんが為ふ其を簇并器械ふ用ひられゆり然
に小笠原の農祖加賀美遠光ハ清光の三男といふを以て三蓋ふ
大小菱を画く紋と成り小笠原貞宗朝臣の時より今の如く中
大の三菱を用ひらるゆり是王の字に象るといひ傳ふ依て貞
宗朝臣の前ゑ分て家ふハ松皮菱を紋とス武田流の大井ハ
陸奥守信武朝臣の三男陸奥守信明を農祖と為寸信明ふ五子
ゆり長を彈正少弼春明ニを北条大和守信丁三を上野介信口と
ゑ四ハ光善寺祥雲庵の住持五ハ大和守明仲兄の子とゆりて
北条氏を称ぜ〻ど此越前守教光ふ二子ゆり大井小太郎成光後

に家督受領して佐渡守と名乗る二男大井民部少輔宗成とゝ
とゝ時ふ越前守教光今般鎌倉府中の寺社兼帯有て少
令尹に補せられ街家農人ふの公事訴訟載判の初め先代
より相傳の公事訴訟の未載許濟ざる分と夫々調の上明白
ふ載判有きれば公事人の何きも其賢明ふして仁智の載判ゆ
ふ街人農民ともにたゝく感涙ふ及びける夫親ふ孝心ある
者い主人ふ忠實ふて両善共ふ全ゝとゝや爰に相及鎌府松葉谷
浅生ケ原町とゝる處ふ住居る煙艸屋喜八とゝる者不慮の
事に依て縄洩の戒と蒙り入牢有て既に定刑ふ失いまんと有
けゝと大川越前侯無類の仁察載許ふ因て助命を得きる

始末なり素此喜八とゝふ者ゝ上野國群馬郡高崎城府の近在ふて
豊岡村農夫喜兵衛とゝふ者の子にて幼名を喜三郎とゝ姉と於
菊妹と於深とゝふて喜三郎幼年ふて父喜兵衛ふ放き母の報育
に依て成人ゝ姉於菊い眉目相應に美く色白く愛敬ふ富るゝこと
く誠實ふて言語少く姓質伶俐く農家貧ゝふ似気ふく讀書
裁縫の業に賢きを以て大正官生駒郷右エ門の家へ求められ勤
仕有て年を累ける中當家の嫡男三郎助と階老の契深く義又
取て嫁女と成て立身ふ及びける妹於深い未ゞ襁褓の中に在て繞に
當歳ちゝ二男喜三郎い幼より孝心深く母に事る事上古ふ名
高き孝子にも劣ざるの至孝ゆて善悪とも母のゝ処ふ隨ひて一言

も悖ふといふ事なり斯て喜三郎熟思するに母の未老人といふも非ず又娘聟三郎助ゞ毎般諭しゝるに依て適男子に産まれたかゝる艸深き遐鄙に於て成長ふ及ずんも殘念なり急ぎ鎌倉へ出て武家なりとも街屋なりとも你ゞ欲方へ勤仕有て天晴成人の後立身發立なるべし母の報命い吾方ふて可然取斗ふたゞなるべ安心の上鎌府へ赴くべし勿論年々出府乃砌止宿ふ及ば花水橋伊勢屋甚右エ門方へ頼の添書をべしあ娘諸共ふ勸ふ隨ひ喜三郎今年十六歳の秋娘聟三郎助ゞ頼の書翰路費何角の雜費金を恵まれ旅裝ひして母并ふ娘夫婦村中の人々ふ暇と告て豊岡より絶ふ三十里餘の路程とぞ

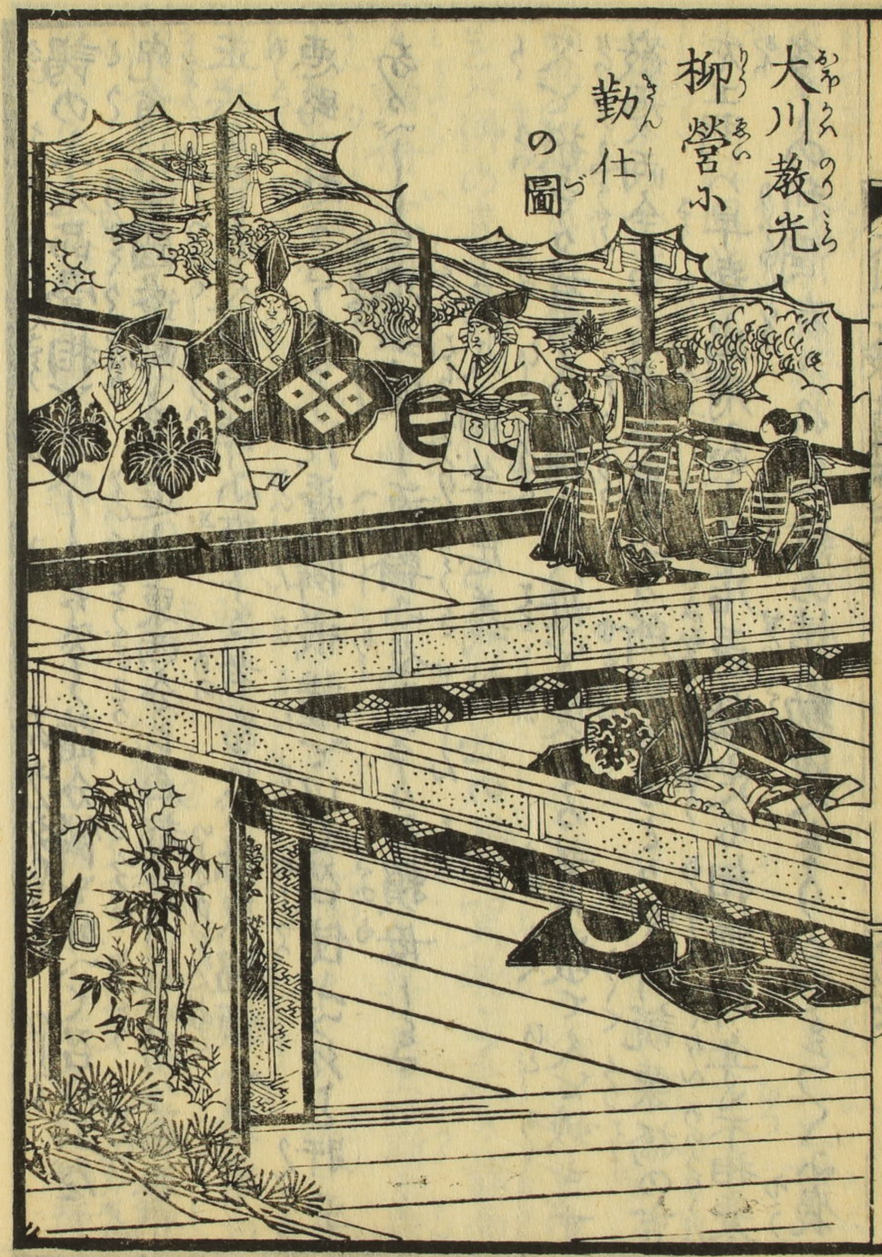
て鎌倉花水橋の少し側なる逆佐川土の某師の門前ふ於て伊勢屋甚右エ門といふ大旅籠屋へ安着し彼三郎助より頼の書翰を差出しなれば甚右エ門外なるに殊更厚く世話有て両三日滞留中鎌府所々の名所旧蹟と使を付て見物ふ及ぼせり処草深き豊岡村より始て大都會へ出しとゆへ目覚しく見物に及び乃ち中伊勢屋も外なるに客先の身内親族と有ゆへ如在なく奉公口を聞合せけるに雪の下餘湖山街といふ下総國栗橋駅ふ於て豪商雜穀屋吉左エ門の出店として角引廻し表口奥行共ふ十五間余の雜物店の有て店頭善兵エとゝ者支配して手代丁児八九人斗も住居なる家へ丁児奉公ふ有附ふなる

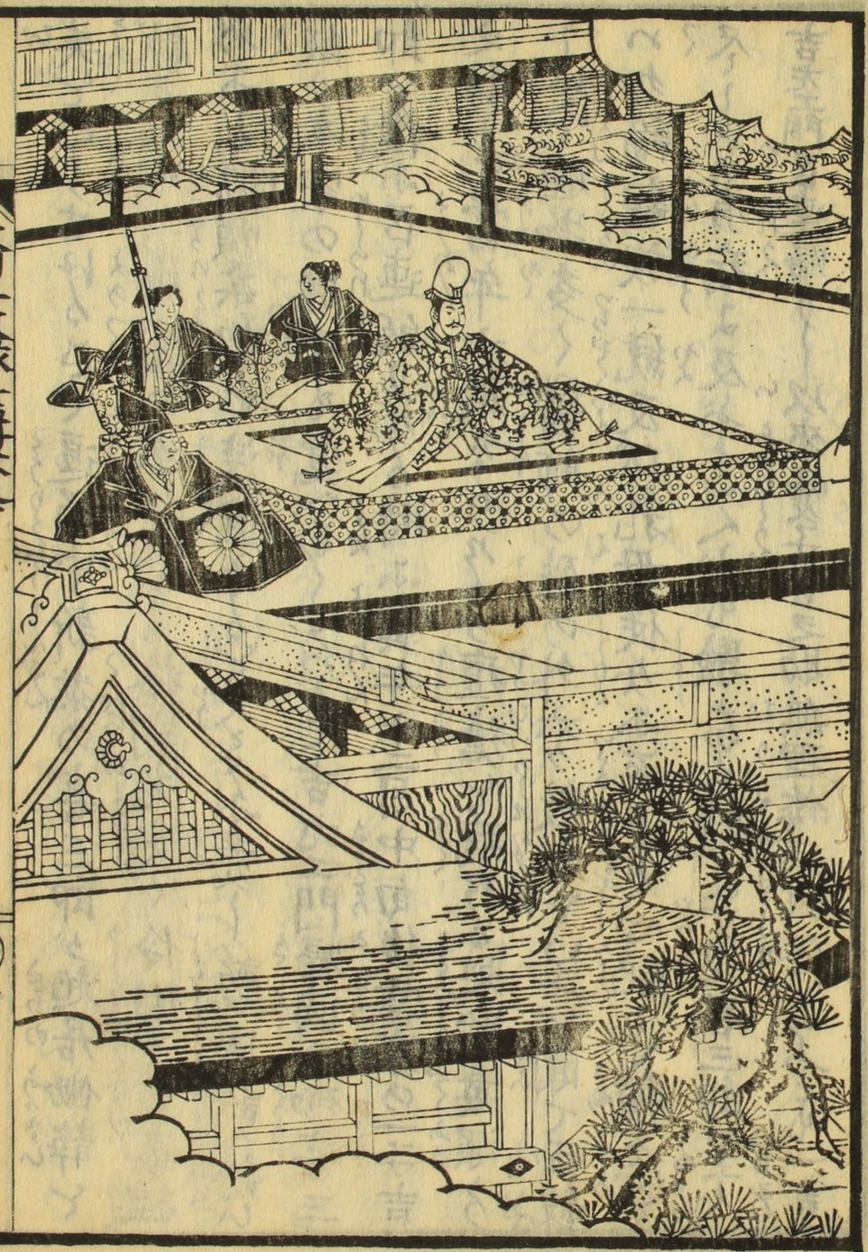
原来孝心深く温順なる姓質ゆゑ淳直なり給ればこれ善兵衛始大小ともに同輩の喜三郎とのくとつて寵愛せゝまて陸まゝく姓質とらゝあゝ人の忌嫌ふこゝに己まこれを好んで用ゐ弁ゝ勤人の労を助けて厭ふ色何と云まても顔色を変ずといふことなけまゝ佛の喜三郎と仇名して出入車力日々買物に来る諸商人諸得意衆迫ゝ可愛がゝざる者ハなりける善兵衛ハ斯る善人を召抱へゝと此ゝ自慢氣ゆゑ未ざ破肌とゝたゝ珍しき者を抱へゝゝ行状の大器と認め國元の本家へ風聽ふ及びける國本ふ於ても當主も是を聞て大きふ歓び末々ハ息吉之助の戸腕なりと未頼母敷と樂ゝなるゝ当末ふ出府の砌初面

謁の上人品骨相を見べゝ去なゝ隨分憐を加へて召仕ふ度ゝ兎角に遠國邊鄙より這出東西分らぬ都會の奉公ゆへ善悪邪正共に召遣人の指揮ふ應ずる者なれば弥以温順ふ兎角に悪路へ赴ざるやうに愛憐戒謹を以て召使ふべゝと肝要なるべゝと忠ふ喩ゝ返翰ふ及びるるゞ頼母しき

喜八幼年忠義誠心の話

父を敬ふる者ハ人を侮らず母を愛する者ハ敬て人を嫉まず敬愛両全なるハ君ふ事ふる所以なるとなる却説栗橋の吉左エ門ハ早春出府なして店風勘定も相済昨年も不相変多くの利潤有々れべ一統の情勤ゆくなるとそまつくふ褒


大川教先
柳營ふ
勤仕
の圖



美とそ〜せけるさて逗留中新泰の喜三郎ゞ起居働静と試るに中々尋常の奉公人とハ格別老実く伶俐上万事控めゆく温順柔和にて淳直なると大きゝ愛〜暫國許へ誘ひ飯り本家の勝手も覚へゆくて吉左エ門帰國の砌喜三郎と撲ゆ召連飯りける時ゆ翌年十二月中旬後當家の一子吉之助と共に當年六歳なりけるゞ痘瘡と病ける処胎毒深ろしいや腫物多く醫師の殊の外六ケ敷趣といふを聞て両親い勿論親族一統及び乳母従女ゆ至迫大心配と種々と尽〜て看病ゆ及ぶとゆ人ども験なく時々丁児喜三郎ハ主人吉左エ門召連帰り〜以來愛子吉之助無理倭尼我侭とゆふとも一言も悖とゆ支なく淳直ゆ聞けるゞゆへゆ明暮喜三郎〜と痘瘡を病て苦き中ゆと喜三郎ゞゆふとを能聞別て歓ける喜三郎もまゝ外ちゝゞ和子君〜と大切に務ける是ゆ於三人夫婦乳母ゆどのおゆいても亦格別なりければ喜三郎も幼主の痘瘡重く六ケ〜と聞て大きゆ歎何卒當家の一子なまゞ無支ゆ本復させたしと思の真実誠心よりして産土八幡宮ハ勿論當駅より二里二十六丁道程ける幸手宿の金毘羅宮へ祈誓と掛て万乞幼主の痘瘡を美く平愈なさしめ玉へば吾三七夜籠ゆて参詣して謝〜奉るべ〜若や終命定業ゆ候べ小僕の命と取て幼主の命に替しめ賜りたしと寒風烈きゝ厳ひもなく

毎朱明と夜三更と井水の側へ往て水と浴て一心不乱ふ祈りろ
初三夜ろとい誰も知る者あろろ四日目の夜婢僕ゞ知り夫
より家内一統ゑ知り主人殊ゑ感〻歎びろろゞ弱年あれ共
喜三郎ハ主人と大切ふ思の一心堅固の誠心神も納受速に医
師の起と投ろ〻〻つふ処の吉之助ゞ重さ痘瘡勿神の利
益應護のゆへゝや跡形もなく美〻〻本復ふ及びろそ芽出
度喜三郎ゞ歓び実ふ天ふも昇る心地〻〻正月四日の夜よ
り三七日夜餘寒猶以甚〻〻指も悴〻〻膚と裂〻〻烈〻〻さ
風ふ躶と冰〻〻夜毎々々二更より躶参り怠ることなく〻家内
の衆人怪〻〻其意趣と尋ろふ和子様の御病氣本快の御

禮参でろと聞く毎ふ其誠實忠義と感歎ふ及ひろる真ゑ金毘
羅宮の内證ゑ能應せ〻〻故ろへ〻〻況哉弱年者の寒風の厭ひも
ふく赤躶ふての苦行と忍ぶとゝゝ今の世人病苦甚〻〻さ時ろ或へ
横難ふ逢〻〻時い心中ふ祈誓〻〻此病と愈〻〻給ろゞ何と供
養〻〻奉べ〻〻此難と逃ゑ〻〻め丑ろ幾度三十三ヶ所と巡禮〻奉
べ〻〻四國と何ろと巡拜ろべ〻〻伊勢両宮熊野へ幾度参ろへ〻〻
祈誓願〻〻ろ〻〻病と療〻〻難と除さての後へ再ひ思ひも出ろ或
い億憶ひ出せども未年詰ろべ〻〻此事早て後参ろべ〻〻吾娘と
縁ふ付て後又吾子ふ家督と譲て後ふ剃髪ゑ後参〻〻ゆゑ色ふ
得手勝手のまゝて言詰給ふ支ろゑ神仏と欺偽り生涯御礼参り

願を果さず其中に死して悔めども効なしは當時の人氣習俗なるに喜三郎は弱年なれども時刻を移さず如王の病本復するや否礼詣する心の中思ひゆゑて殊勝なり但し躰の行跡足の行をぞなるは佛法神道ともなる支なれども吾邦は昔より習俗の人の多く誓ある支なり然れども釈迦如来の因位なれも法の為ゆへ身を火の坑に投或は身に千燈明を燃し千の釘を打五ひしをなり今の世をい益なる支に思へども若行をも能忍ひて法の為ゆへ給ふは唯心の勇猛至誠なるまゝを表なるまでのこと此喜三郎も原来邪正を弁へるなれども心付もあれまでは唯弱年者の躰の行は善支なりと一心に思ひ詰されば主人の為として寒風に能く其苦行を忍ぶは天晴忠義至誠の及処なれば勇猛の善心なれば吉左エ門夫婦は其心の操を感じ厚く褒美を与へまべケ程のこと奉公人の當然なりとして一向に受を誇らず相変ず万支控めに淳直に勢めけるぞ殊勝なり

喜八於梅と見初話

法華經安樂壽品曰滅皆懐悪暮向生渇仰心しらや世の中に陰陽の昇降に依て万物を生じ男女の愛情交合の道有て以國家連綿と子孫永久の基なる人各假初にも人と悪慕の懐ひに因て神佛を信心に及び渇仰の心發るは天

地の常理喜怒り愛憎樂衣食欲心の七情發るの基
とゝや叔も光陰矢よりも疾く日月鋏炮のごゝとく星霜と累
ぬる夏実ハ夢の如さゝるされば穀物屋吉左衛門方ハて愛子の
重き痘瘡も喜三郎が誠心の祈願ハ因て無支殊ハ美く本
復よ及びけりとて殊のわろ歡びて喜三郎と又ちゝ者ハ愛
召遣ひけるぶ出ゝ〜九三歳よ及び名さん喜八と改め一廉の
丈夫ハ成商の道ハ賢く殊の日ら間よ合けるが鎌倉出店の手
代一人病氣ハ付引取無人ちりとて殊ハ支配人善兵工も追々老
年に及び吾片脇よもせま〜外よ是ぞといつて実意の手代もハ
ゞれば善兵工より懇望ハ依て喜八改て鎌倉へ飯り善兵工の

支配ハ隨いよ〜私ちく動ける時よ喜八今年二十五歳の秋
八月善兵工ら指揮ハ依て出羽南部路へ罷下り年末の賀魚と
て鮭の塩引を買込て下るとて買物證金として百両を懐ハして下り
がけハ栗橋の本家へ用向もけりかゝく千住街道へ鎌倉より
五里半七丁と赴草刈駅と歩過るに寅早時刻ちれば昼支度
中食ゝと當駅の出外ちる俺〜けよとくける一膳飯とゝ札鞭と
出〜る貨食部へ向り食を求めんとけるよ應へて家女と覚〜ハ綿
袷と外〜茶煙艸盆を持出て餐ハとみるハ年の頃ハ未十九ら九
佐ハ見へて其著服ゐどの垢染ていと見苦〜汚きる客鶏
ゝて殊よ引括抗髪ゝて寂貧氣よ見へちゞ〜姿物語の尋常

小肥太らず痩ず色白く中肉にて脊も高からず低からずして
凡実貞にて眼の張よく然も眼中愛敬十分にて溢るゝごと
く鼻柱通り唇小さく紅ふくゝ誠ふ古ふ聞く漢土の揚貴妃吾邦
の衣通小町が再来にやと恥しかゝぬ風姿にて挨拶がゝも卑かぬ
言語多くは老実やうなると見初て喜八は忽に空蟬のごく現に成
て扨もく世にかゝる美しき婦人も有りの哉我鎌倉ふ勤仕以来
八九年の間婦人を見支幾億万人とふ数て知らぬとゝくども
かゝる妖嫌侘し氣なる暮を為なぐ〜斯のごく尋常に生
立て全備せし婦人を見ずに吾適男子に生き来らて縁有
て日本廣〜とゝくども殊更三都隨一とゝつべき鎌倉に

住居の良縁と受とゝくども希ふ斯る美婦人を妻ふ娶りてこそ此世出
るの功かゝりとつひつべし忽日頃の忠実も打忘れ此婦人ふ放心
し現に成て何ぞ時と迄〜程能び吾思と告んとおのれて平常
一吸も飲ざるの酒ちどとそふて暫見惚て主用と打忘陳ぐり
居ぐるぐる此家の真向に髪ゆい床の有るふ忽一手と
思付飲食せし処の酒飯の價をぐるぐる祢て女のいふ処よりそ
多分に排別に紙に色〜て茶代とゝつて貳百錢と膳の縁
に残置暇と告て彼髪結床へ向て格別に乱もせざるに髪日代
とそて其間に余処にぐ〜彼貨食店の女房のかる賤業ふ家傍乗
ぐ上品ふして物腰容貞の格別に勝しが故かる人の女と見へ

うつくしき人の果てゝ〜と不審せば髪結の應へてさ
ぶべ社なの女房の名ハ於梅といふる以前ハ當駅ふあいて
相應ある暮〜〜〜〜〜〜矣皆の一女うて讀書裁縫琴の業
一通り能調ひ老実く天晴ある婦人るゞ〜人の運とつのを
眉目の好醜よりよりぬりのうて養子とくとい内ハ爺親ふ
い急病うて離ぶ母親ハ長のうづ〜ひうて家財諸雑具過半
賣代ちゝ〜 母親の死去後い當処の溢者うて名と胴脉の熊吉
とつの者父の杏庵存生の内於摂と夫婦ハ成べ〜契約右と
て無理ハ躍込女房ふせんとつくぶも於梅どの不承知の人毎般
お擲の無理折鑒其身ハ博奕と家業の母うに家も田地も吾

りの貝ハ賣代ちゝ〜手ゞ合ぬとつふて内ハ残り少るゝ衣服雑具
を引浚へ賣払後ふ已ゞ博業ふ屑博奕ふるうる時帯紐解
ざると爵憤ふて妻於梅と鎌府の廓へ二十両ゝ三十金うて賣女ふ
遣るの遣らのと叔々氣毒ある始終るう元来表ハ女房とつふ称
号斗りふて未心のまゝるゞ氣肌の合ぬ女夫ゆへ氣ゞ利ぬとろ
或ハ博奕ハ屑て戻りうとも其氣を汲取支をちゝぬ白癡女
あゞ〜〜罵り踏ゞ蹴ゝ〜〜擲るふ泪の乾く間ハるく夫故に
折々ハ於梅の逼るて池へ入て死ゆんとるる又ハ川へ身を没んゝ〜
て誠ハ修羅道の暮〜〜〜心の休まる間ハ夫故ハ見受五ゞ
くに髪貝を什されゝ誠ふ哀惜氣ある身の上うと聞度々ふ喜

八八泪を催し弥りて思増て何卒助け連うゝ女房ふ
為る仕せうこそうゝ哀と心の中ふ鬼つ追つ私案のうゝ此
駅う又此邉ゝ口とゝく利く義侠とういふイ男を磨く壮夫
いるゝ哉と問ゝれハ髪結の應へて彼の幸手やの亭主の名
と胴脉の熊吉と仇名せう彼ゞ義又の有馬の条八といふ
て以前ハ鎌府ふおいて秋馬侯の乗輿の棒又とう年寄ち
當駅の産ゆゝ古ゝ飯り此辺二三十里前後の侠夫ちうと聞
喜八ハ大ゝゝ悦髪結賃も定銭ちうハ多く排暇と告て
立出彼侠夫条八ゞ宅と後戻ゝて尋往ゝ案内と乞て僕ハ鎌
府の商人ゝて喜八といふ者ちうう當家の御主人ハ此街道三四

十里の間ゝ於侠客君と羨り折入て御頼申度子細小付拠ふ
く旅中ふゞ御意得度罷出待処ゝ伏乞御面會下され
ちうび忝ゝの演舌慇懃ちうゝ義子の者其趣と告ると聞て
条八眉と顰ゝゞ何ハ兎も角侠客と聞て便り力ゝ来り
者一言聞捨ゝ成難殊更鎌府の人とゝれバゝよく以等閑ゝ
成難格子の間へ通せゝとの指揮ゝ隨ひ取次義子の案内ゝ
従ふて喜八ハ帥鞋と脱裾と下し金壹両紙ゝ包ゝ菓子料と認め
卒尓ちうゞ別段ゝ御酒ゝとも持参仕ゝく本意の処通り懸族中の
身ゝて當駅の不知案内の儀ゆゝ近頃失礼ちうゞ袖産と差半け
ゝとも条八是と推飯御頼の一条と羨ゝゝ以前ゝゝ

一せんきり
一にくせん
一番品ものは
代十二文
茶屋

草加駅
にく喜八
於梅を見
初高
図

御音物を受納そべき条八ふいなり義を因て美知もなるぬ
支なり又一命と的を頼まれるやうね儀なり俠善悪とも頼
まをて後へ引ぬが俠客の平常といふなるの品を因て美知成
べしまるる美知成ぐるれ義もそべなる屋しに大休なるべ調へて進ぜやう孫
に鎌府といふしへ猶更の支芝包まずと御頼の子細申聞されよと有
それば喜八大さふ悦び御恥なぐるしと声を諧めて訳ふ及びなる

俠客条八於梅を喜八を會なる話

吉田の兼好法師が従然艸を色好まざるん夫い玉の盃底なれがど
と述られしへい全邪婬無理好色を勧るふいなるべ唯人情の切なる
弁へ知りて憐れの心有んと戒られなる名言なり喜八い今更

ふ条八ふ問まを面恥しく思ひあぐるく隠すべれをを非ざれば於梅
に懸相ふしるるやうをと語人の女房ふ懸相をるい大膽なりと
いふ支を弁へなるぐ煩脳の犬追ども去やるべしを右の始末今宵
一夜成ども御情をめて添臥いあるをとも責て同座をるれて
かく迫あるへ処の心底を明しく廣大の御慈悲を以て一席
同會せしめ給ぐ假令今宵限ふて一命を果をとも思残す
支更ふなく尤五歳を相成そべまとも女を肌を解をることを
形くいなる宿縁を彼於梅どのやうべ此ふ命を取るるとも
残念なし主命ふ寄て今般出羽南部路へ下り買物の價百両金持参
なり此金子を差ぐて成とも一夜の添臥心乃底を語あるるべ

死もるとも厭ひなくして懐中より財布取出し条八の前
ふ差置此金子を無しくハ主家へ對して面皮をなれば命を捨るを覚悟
の上の御頼なれば伏乞此趣を御聞届下されくとぞ頼る条八も
思懸なく頼の一言聞て驚くとくも動ず条八熟慮念有て左程ふ
迫一心ふ思込主人より預る金子いおろ假令命を捨て成共一心堅固
と思ひ込ま段氣毒も厳惜き心底なり染奴身の上の始末を
兼知の上乃おくの彼が夫へ我が義子なが〳〵叔貴様の妻を一
夜他と貸て呉まいらとも義父の業ゐ居ゐ〳〵何とも言難き始末
ハテ如何して能らふやと遁の条八も暫し私案と暮て徳とぞおくり
ろが良有て横掌を歩て諾き何へ兎も角胴脉を呼よを彼が

心底と捜る上趣段ゐり客人ふハ間挾なが〳〵奥の間と於て須
更休息なれと妻於結ふ指揮して奥座敷へ誘ひを条八ハ義子
と令して熊吉と呼しめるる勿論胴樂と常とる熊吉なれハ吾
住宅ふ〳〵いふ支きく何とるとも彼博業場ふ罷在とく
元来兼知の義子ゆへ三四ヶ処と申りくふ索ゐる同道ふて帰りなれ
い条八ハ熊吉ふ向ひ聞を此間中へ余程深垂てゐるが此頃の手合ハ
いが〳〵少しハ掴く戻りしかと向まて顔と皺り例とも貪を之の上金
手と出せ〳〵ちど手が合ねばさなり手が出せまとハ雑候の手詰
て叶ひませぬゆいて於梅と毎度の支ゐが〳〵賣妓しまいうと
思まを〳〵 いふ詞の尾と付て条八が今宵一夜於梅と傾が宅へ貸

て貴ひらに外でもなん鎌府〻の珍客が有り一盃食應ふやう
ら及ん所がまこと去るぎ〻衣裳帯前垂ちども大〻殺し
て有で有ふ髪もさうとう結せ奥湯へも入て少し美粧て黄昏まへ
〻必ず来るもうふ今宵一夜の雇ひ賃どや此金で質受と迅ま
といつゝ判金三枚と渡せば熊吉ハ怕りしく推戴き義父の恩恵
久〻ぶりの黄金佛と笑坪み入て熊吉ハ三金と懐ふいそくと
志て飯りる条八ハ獨諾き仕て外〻〻頬笑て喜ふ會て
楽〻るうハ産ぎ易ひとうや思の外ふ心易美知させま〻〻去
あぎ〻今宵於梅ま逢せそべるとハいくども心の底の咄合ハ兒も角
我も顔と責義父ぎまハ必ず義子の妻と金子と取て色情ふ及

せうとうふ向後顔ぎ立ずず又義子等へ對して海ど此儀ふ於
てハ決して無用ぎう互ひま咄合のみの支但し其許ハ酒ハ好まれ
ぎるも盃銚子と出し置ぎるとハ表ぎ海ど委細ハ我ま任されま
といふ此百両の内三両ぎひの雇錢貳歩ぎ酒肴代として残ま喜
八へ渡し心のうけをめうう合ゆるく噺といふられまと堅く詞と
番ひけまべ喜八ハ飛立嬉しさあて段々の御心配千万有がさし此御
恩ハ生涯忘ぎ〻しと日の暮るとハ侍るる偖熊吉ハ急ぎ家ふ飯り
思もあるる判金三枚手に握る嬉しさ極義父あて亦々と委細ふ
噺俄ま於梅ぎ衣裳帯まぎと質受ゆ〻髪結せ銭湯へ遣るゆ〻
上と下へと歓びさまざふ美婦人とうられし於梅の髪とゆひ湯へ入て

化粧なせ〳〵その面影平日に変り人々見蕩れるこの支あり聽て彼
是と黄昏前条八が宅へ来夫婦に一礼を述べれば条八は妻於縞
誘ひ出せ茶煙艸盆などを持運ばせ喜八ふ引合れば喜八も寂
前見初し時とは扳群の相違其美さ奇異さに倍増る装
ふ愈魂を天外に飛し現なきるぞ道理なる

大川仁政録彙輯巻之一 終